

<資料>

翻訳: エクトール・ベルリオズ『ユーフォニア、あるいは音楽都市』(二)⁽¹⁾

Hector Berlioz's *Euphonia ou la ville musicale* (Japanese Translation) II

塚田 花恵

TSUKADA Hanae

本稿は、19世紀フランスの作曲家エクトール・ベルリオズが執筆した小説『ユーフォニア、あるいは音楽都市』のうち、「パリ」と「第三の手紙」を、日本語に翻訳したものである。この小説は、1844年に音楽雑誌『ルヴュ・エ・ガゼット・ミュージカル・ド・パリ』に発表され、その後『オーケストラ夜話』(1852年)の一部となった。ベルリオズはこの小説において、ファム・ファタルによって狂わせられていく二人の青年作曲家——これらの登場人物は、ベルリオズ自身と、かつて彼と恋愛関係にあったピアニストのカミーユ・モークをモデルとしている——の悲劇を軸として、同時代のヨーロッパの音楽文化を、ときにユーモアを交えて鮮やかに描き出した。ベルリオズの伝記的な資料としても、19世紀フランスの音楽批評としても、第一級の史的価値をもつテキストだと言えるだろう。

キーワード: ベルリオズ、『ユーフォニア』、グルック、《アルセスト》、カミーユ・モーク

パリ

(豪華な設えの客間)

ミナ⁽²⁾ (一人で) ああ、もう！ なんだか私、退屈しちゃいそう！ あの男たちってば、私をからかっているのかしら！ なんてことでしょうね！ あの人たちのなかでまだ誰も、今日のお楽しみの提案もしてこないなんて！ 私、一人きりで四時間も放って置かれているじゃないの。みんなのなかで一番熱心で、一番気遣いのできる男爵でさえ、まだ来ない！ ……多分彼らは、私のことをそっとしておいてくれているのでしょうかね。私を崇拜するあの伊達男たちは、みんな本当にどうしようもないほどの馬鹿よ。会話といたら、パーティー、競馬、火遊び、スキャンダル、お洒落のことしかできない。知性や芸術の感性を示す言葉なんて一つもないし、心から生まれ出たものが何もないわ。私はね、何よりもまず、芸術家なの。私は芸術家なのよ……魂も、心も。どうして、私、そう言うことを躊躇うの？ ……私には心も魂もあると、本当に、確信している？ ……ふん！ はっきりしているのはね、グジレフのことなんて、もう少しも愛してないってこと。お熱い手紙をいくつか戴いたけれど、返事もしてないわ。彼は私を責める。絶望する。それで私は、彼のことを考える……ときどきな、でもほとんどないわね。ほらでも、私のせいではないわよ。だって、お馬鹿な男爵さんが言うように、いない者はいつも悪いことにされる、でもいる者はいつも受け入れられるものですよ。私に世界を作り直す責任はないもの。彼は、どうして行ってしまったのでしょうかねえ？ 恋をしている男は、恋人の側を離れるべきではないの。世界のなかで、彼女のこと以外は見てはいけないう。他の一切なんて捨ててしまうべきなのよ。

ファニ (入ってくる) マダム、新聞と手紙が二通届いておりますよ。

ミナ (新聞の一つを開きながら) あら！ ……まあ！ 一週間後にユーフォニアでグルック⁽³⁾の祭典が開かれるって！ 行きたいわ、そしてそこで歌うの。(読みながら)「シェトランドが作曲した賛歌が街中で歌われ、人々の会話はそのことで持ちきりとなっている。極めて高貴な熱狂が、これほど壮麗に表現されたことが、かつてあっただ

ろうか。シェトランドは傑出した人物だ。彼と他の人々を隔てているのは、彼の才能、性格、そして、謎に満ちたその人生である」。ファニ、母を呼んでちょうだい。

ファニ (出ていきながら) マダム、お手紙を読んでいないじゃありませんか。一通は貴女様のフィアンセのグジレフ氏からのものだと思いますよ。

ミナ (一人で) 私のフィアンセですって！ おかしな言葉。ああ！ フィアンセだなんて、どうかしてるでしょ。でも、彼も私のことを僕のフィアンセって呼ぶかもね！ それなら私もどうかしてたってことね！ 馬鹿みたい、そんな常軌を逸した言葉に振り回されて！ 何もかもが気に入らないし、苛々するし、爆発しそう……………。目ざとく見抜いてくれたわね、彼女。ええ、この手紙は、私に忠誠を尽くすグジレフからよ。そうよ……………あれこれ責め立てて……………自分の苦しみとか……………自分の気持ちとか……………いつもの繰り言……………。お若い御方！ しつこいのよ。まったく、可哀想なグジレフったら、おしまいね！ もう！ そもそもね、迷惑なのよ、永遠の情熱に身を焦がしている輩っていうのは！ 一体誰が、あの人たちに変わらないでいてくれなんて頼むかしら？ ……一体誰が、私を熱愛してくれだなんて、彼に頼んだかしら？ ……誰？ ……ああ！ 私か、私でしょうね。彼はそんなことを考えてもいなかったわね。彼が私のために人生の休息を失ってしまった今 (小説のようなフレーズ)、彼を見捨てるなんて、少しひどいかしら。まあ、でも……………誰だって人生は一度きりだしね。

もう一通のお便りを見てみましょう！ (笑って) あはは！ こちらはまた、ずいぶんと簡潔な書状ですこと！ 上手に描かれた一頭の馬、そのようね、そして言葉は一つも書かれていない。これは、送り主を示しているようだし、象形文字を使った文章のようでもあるわ！ その意味するところは、貴女様に飼われている牛馬が、森を散策するためにお待ちしております、ということじゃないかしら。一人で走り回っておいでなさいな。(アペ夫人がのそのそと近づいてくる) もう、お母様、お呼びしたのに、ごゆっくりですこと！ 三十分以上も、もう待ちくたびれてしまったわ！ でも、もたもたしている時間はなくてよ！

アペ夫人 それで、何の御用かしら？ またどんな無謀なことを企んでいるのでしょうか？ ずいぶんと興奮して！

ミナ 行きましょう！

アペ夫人 お一人でどうぞ！

ミナ お母様、行きましょうよ！

アペ夫人 私はね、パリを離れたくないのよ。ここですごく満足しているの。それに、行きましょうって、あなたのぱっとしない恋人に会うためでしょう？ ミナ、繰り返しますけれど、あなたの行動はとても許容できるものではないし、あなたが私に負う義務と、自分自身に負う義務に背くものですよ。その結婚は、どんなかたちであっても私たちに相応しいものではないし、その若者には十分な財産がないでしょう！ それに彼は、女に対して本当に突飛な考えを、妄想をね、抱いていると思うわ！ まったくもう、あなたの頭はおかしいわよ、本当に馬鹿よ。言っては悪いけれどね。世間知らずでもあります。才気も才能も溢れるほどなのに。そんな選択も、そんなケツコンのやり方も、お目にかかったことがないわ。あなたがここでいつも見ている華やかな社交界が、あなたを良識の道に戻してくれたものと、思っていたのだけれど。でも、あなたの気まぐれは断続的に燃え上がるようだし、また発作が起こっているようね。

ミナ (大袈裟に尊敬の念を示すようにお辞儀をしながら) 尊敬するお母様、素晴らしい！ 上手に即興をなさった、というわけではないでしょうけど。だって、お母様はそのお説教を準備するために、私をずいぶんと待たせたのでしょ！ それでも雄弁には価値がありますわね。でも、お母様がお説教をした相手は、改宗者よ。ですから、行きましょう、ユーフォニアへ。私はグルックの祭典で歌うの。グジレフのことなんて、もう考えていないわ。当面は、あの人の追跡から身を守るために、名前を変えましょう。私の名はナディラ。お母様は、私のおぼと

いうことにしてね。私はオーストリア人の新人歌手よ。偉大なるシェトランドさんが、私を護ってくださいでしょう。そして、私は途方もない成功を手にするの。みんなが私に夢中になるのよ。その後は……時が来ればわかるでしょう。

アペ夫人 まあ！ 神よ、彼女を祝福したまえ！ 私の娘が戻ってきたわ。ついに理性が……。私の美しい子、抱きしめてちょうだい！ ああ！ 嬉しくて息もできないわ！ 婚約についての馬鹿げたことは、もう考えていないのね！ それは良かった！ 出発しましょう。グジレフの阿呆め、無礼にも私のミナに想いを寄せて、私から奪うつもりでいたなんて。ああ！ せめてあいつに、あの求婚者に、私から言うてやることができればいいのだけれど。それは私のことでもあるわけだしね。言うてやるとするか……。生意気な野郎め！ 才能に溢れる、美しい歌姫なのよ！ そうよ、お坊ちゃん、あの娘が自分のものだって、せいぜい期待していればいいさ！ 十行の手紙でお払い箱にしてやるわ。二時間のうちに荷造りは終わるだろう。私たちの郵便の飛行船の準備はできたし、明日にはユーフォニアに着くはず。そこで私たちは成功を取めるんだ。その頃、お馬鹿な坊やは、私たちを追いかけて逆の方向に行くでしょう。ははは！ こんがらがった糸で苦しむがいいわ。（アペ夫人は鯨のように息を吐きながら、十字を切って、出ていく）

ファニ（少し前にそこに戻ってきて）マダム、あの御方とはお別れになるのです？

ミナ そう、おしまい。

ファニ まあ、なんてこと。あの方は、あれほど貴女様に愛を捧げて、そしてずいぶんと期待を募らせておられましたのに！ もう好きではないのですか、ほんの少しも？

ミナ 全く。

ファニ なんだか怖くなってしまいます。何か悪いことが起きるんじゃないかしら。彼は自殺でもするんじゃないでしょうか。

ミナ あ、そう！

ファニ 絶対に、彼は自殺を図ると思います！

ミナ やめてよ、もう！

ファニ 哀れな若者！

ミナ ああ、もう、黙ってくれない？ この馬鹿女。お母様のところに行って、出発の準備を手伝いなさいよ。あれこれ考えるのは止めてちょうだい、私のもとで働きたいならね。（ファニは出ていく）

ミナ（一人で）自殺するですって……！ 私のせいなのかしら……、そもそも、それって私の責任なの……もう好きじゃないからって！

彼女はピアノの前に座り、数分のあいだ歌う。そして、鍵盤の上に指を走らせて、半年前に聴いたシェトランドの第一交響曲の主題を再現する。弾きながら呟く。「本当に美しい！ この旋律のなかには、優美で柔らかな何か、気まぐれに燃え上がる何かがあるわ！……」。そこで止まる……長い沈黙……彼女は交響曲の主題を再び繰り返す。「シェトランドは傑出した人物だ！……彼と他の人々を隔てているのは……その才能、性格（弾き続けて）そして、謎に満ちたその人生である……（短調になって）あいつが君を好きになるなんて絶対にないって、グジレフは言ったわよね！⁽⁴⁾」。主題が再びフーガで現れ、ずれて、崩壊する。クレッシェンド。長調で爆発する。ミナは鏡のところへ行き、髪を整える、交響曲の主題のはじめの数小節を口ずさみながら……。再びの沈黙。彼女は、馬が描かれている男爵の手紙にちらりと目をやる。ペンを手に取って、その動物の首のところに宙に浮いた手綱を線で描く。そして呼鈴を鳴らす。配達のための使用人が現れる。彼に向かって言う。「これを男爵にお

返ししてきて、私の返事よ。(傍白) 彼はお馬鹿さんだから、理解できないでしょうね」。

ファニ (入ってくる) マダム、準備が整いました。

ミナ お母様は誰かに手紙を書いたのかしら……？

ファニ ええ、マダム、お手紙を郵便屋へ持っていったところでございます。

ミナ 二人とも飛行船に乗って。私も後から行くわ。

小間使いは遠ざかる。ミナは長椅子に腰を下ろし、胸の前で腕を組んで、少しのあいだ考え込む。彼女はうつむき、わずかにため息を漏らす。頬が少し紅潮する。ようやく手袋を掴むと、立ち上がって、不機嫌な調子で「ふん！ あの方が自分で何とかすればいいことよ！」と言いながら出ていく。

第三の手紙

2344年7月6日、ユーフォニア

シェトランドからグジレフへ

僕の親愛なる、そして悲しみに暮れている友よ、ユーフォニアの音楽憲章と説明を同封するよ。これらの資料は、いくつかの点で不完全だとは思ふ。でも、君には暇ができてしまったわけだし、僕が急ぎで仕上げたものを修正することはできるよね。自分自身の記憶を辿れば、完全なものにするのにそれほど苦労はいらないはずだ。音楽の統制を図るための規則の文章を、そのまま君に送ることはできなかった。僕らの美しく調和した都市についての大まかなところを、正確でありながらも簡潔な描写で、シチリアの学者さんたちに理解してもらう必要がある。だから僕は、そこそこの出来具合であったとしても、ユーフォニアの姿を描写せねばならなかったんだ。でも、僕が書いたものの不正確なところや、冗長であったり不完全であったりするところを、君は許してくれるだろうと思っているよ。数日前から、異常とも言える感情によって、僕が激しく狂わせられてしまっていることを知ったならばね。君も知っているように、僕はグルックの祭典に関わる一切の責任を任されていて、神殿の周りで歌うための賛歌を作曲しなくてはならなかった。テッサリア風の宮殿で上演する《アルセスト》⁽⁵⁾の稽古も監督しなくてはならなかったし、僕の賛歌の合唱練習も仕切らなくてはいけなかったし、さらに君の代わりに弦楽器の運営をする必要もあった。でも、そんなのは僕には何でもないことだったよ。脳裏を離れない暗い影や、耐えがたい思い出や、深い失望。かつて僕のなかにあった癒えることのない悲しみが僕をそこに沈めたけれど、でもそれらがあったから、少なくとも僕の気性は情熱のどんな影響も受けずに、落ち着いた重々しさを得ることができた。それは、活動を抑圧するものではなく、むしろ後押しするものだったんだ。不幸なことに、君からすっかり失われてしまっているものだけれどね。我々の芸術家としての能力を麻痺させるものは、苦悩だ。ただそれだけは、我々の心を燃やし尽くさんばかりに締め付けて、極めて高貴な躍動を止めてしまう。そして、我々を憔悴させ、硬直させ、狂人にし、愚者にする。君も知っているように、僕にはそういう焼けつくような苦痛というのはなかったんだ。僕の心と感覚は平穏のなかにあって、死の眠りのなかで微睡んでいた……あの……白い星⁽⁶⁾が僕の空から消えてから……。僕の思考と想像力はいっそう活気づいた。それに、僕は自分の時間のほとんど全てを自分で使い、芸術家の理性の命ずるがままに時間を費やすことができた。僕は今まで、上手くやっていたんだ。それは、栄光への愛によってではなく、美への愛によってね。僕たちは二人とも、傲慢さを満たそうとする下心などは持っていないから、本能的に後者へと向かっていくけれどもね。

この数日のあいだ、僕の心を揺さぶり、乱し、荒らすもの、それは賛歌の作曲ではない。僕らの音楽都市の

人々がくれた喝采でもないし、大臣の称賛でもない。皇帝がお喜びになったことでもない。閣下によれば、僕の音楽に我を忘れるほど熱狂なさったそうだけれど。この作品は僕にも途轍もなく大きな感動を生んだけれども、それでもないんだ。そういうことじゃないんだよ。不可解な出来事なんだ。僕は打ちのめされた。これほどまでに何かに打ちのめされるなんて、考えられなかった。そして不幸なことに、その衝撃が全く消えてなくなるんだ。

ある日の長い稽古の後で、夕方のひんやりとした空気に当たろう⁽⁷⁾と、僕は自分の小さな飛行船でだらしなく横になって、高いところまで上がって陽が消えていくのを見ていた。そして雲の周りを飛んでいたら、そのなかから鋭く、でも透明な、女の声が聞こえたんだ。その並々ならぬアジリテ、気まぐれな跳躍や楽しげに転がる音が、歌のなかで響いていて、不思議な、眼には見えない何処かの鳥が歌っているかのようなようだった。僕はすぐに運転を止めた……。ちょっと待っていたら、沈みゆく陽に照らされて紅く染まった霞のなかを、優雅な気球が、ユーフォニアのほうへ急いで向かって行くのが見えた。若い女性が一人、その飛行船の前方に立っていたんだ。彼女は、魅惑的な様子で、ハーブに身体をもたせかけていた。ときどき弦を爪弾くその右手には、ダイヤモンドが煌めいている。彼女は一人きりで乗っていたわけではなく、船のなかでは他の女性たちが、窓の前を行ったり来たりしていた。最初は、僕らの都市のソプラノ通り⁽⁸⁾に住む若い合唱リーダーの何人かが、僕と同じように、空の散策をし終えたところだろうと考えた。彼女は、ありとあらゆる種類の気狂いじみたヴォカリーズの装飾を施しながら、僕の第一交響曲の主題を歌っていた。僕は、その作品はユーフォニアの人々以外にはほとんど知られていないだろうと思ったんだ。でも間もなく、華麗な囀りを聞かせてくれる、その魅力溢れる生き物をもっと近くで観察して判明したことには、彼女は僕たちの都市の住民ではなかったし、これまでに一度もユーフォニアに姿を見せたことはなかった。彼女の眼差しは、上の空のようでもあり、また何かを感じ取っているようでもあり、その表情の独特さに僕は驚かされた。そしてすぐに、そのような女性に愛を捧げ、しかし彼女からの愛は得ることのできない男の不幸について、思いを巡らせた。けれどその後は、もうそれ以上に考えたりはしなかった……。ハルツ山地の高い峰々が、もう地平線にある太陽を覆い隠していた。僕は、その逃げゆく星をもう一度見ようと飛行船を数百ピエ⁽⁹⁾ほど垂直に上昇させ、地上では得られない恍惚とした静寂のなかで、少しのあいだそれをじっと眺めた。でもそのうちに、夢心地の状態で空に一人でいることに飽きてしまって、西風に乗って遠くの塔⁽¹⁰⁾から鳴る夜の賛歌の調べも聞こえてきたし、僕は下に降りていった。いや、矢のように急降下した。君も知っている、市の城壁の外にある僕の家の上にね。僕はそこで一夜を過ごした。よく眠れなかったよ。夢のなかに、数時間のあいだに幾度も幾度も、薔薇色と金色に染まる雲から現れ、ハーブに身体をもたせかける、その美しい見知らぬひとが出てきた。そして最後には、僕が彼女を冷酷にあしらい、僕のひどい態度やひどい言葉が彼女を恐ろしいほどに不幸にする、という夢まで見てしまった。彼女は、僕の足元で打ちひしがれて涙する。でも僕は冷ややかに、この優雅ではあるけれども危険な動物を服従させ得たことに、満足を覚えるんだ。僕の魂はそんな感情からは遠く離れたところにあるはずなのに、何という心象を生み出したことだろう！！僕は、起きるとすぐに薔薇の植え込みの奥に行き行って座り、無意識のうちに、自分が何をしているかを考えることもなく、エオリアン・ハーブの両扉を開けた。一瞬のうちに、響きが庭に溢れた。朝の風が気まぐれに吹き荒れて、クレッシェンド、フォルテ、デクレッシェンド、ピアノシモが無秩序に続いた。僕はひどく震えたけれど、このメランコリーを誘う楽器の扉を閉じて苦悩を遠ざけたいとは、少しも思わなかった。それどころか、僕はそれを楽しみ、じっと動かずに耳を傾けた。風がそれまでよりも強く吹き付けると、ハーブからは情熱の叫びのような属七の和音が鳴った。そしてそれは、唸りながら、植え込みの向こうへと運ばれていった。すると、どういうことか、デクレッシェンドしたところからアルペジオが流れてきて、そこに、前の日に見知らぬ人の歌で聴いた主題、つまり、僕の第一交響曲の主題の、最初の数小節の旋律の音があったんだ。風の演奏会が始まってから眼を瞑っていたのだけれど、僕はこの自然の悪戯に驚いてしまって、眼を開けた。……彼女が、僕の前に立って

いたんだ。その姿は、美しく、存在感があって、気高くて。女神！僕は飛び起きた。——マダム！——空気の精たちのたいそう美しい言祝ぎが、まさにちょうど行われているときにご挨拶ができて、嬉しいですね、ムッシュー。きっと精霊たちは、貴方を寛容な気持ちにさせてくれるのではないのでしょうか。そのお気持ちを求めて、参りましたの。偉大なるシェトランドさんが惜しみなく与えてくださることはない、とも伺いましたけれど。——マダム、こんな早朝に、僕の静寂を賑やかにするためにお越しくくださるなんて、一体どちら様ですか？——私は、ナディラと申します。歌手です。ウィーンから参りました。グルックの祭典を拝見したくて。私、そこで歌いたいです。それで、私をプログラムに入れていただけないかと、お願いに参りました。——マダム……。——ああ！事前に歌を聴いていただく必要がありますわね。それは当然のことですわ。——その必要はありませんよ。すでに聴かせていただきましたから。——いつ、どちらで？——昨夜、空で。——ああ！お一人で彷徨っていたのは、貴方でしたの？私が雲から出たときにお会いしましたね。ちょうどそのとき、貴方がお作りになった素晴らしい旋律を歌っていたのでしたね。きっとその美しいフレーズは、私たちの二度の出逢いの序奏となる運命だったのでしょ。——ええ、それは僕です。——それで、私の歌を聴いてくださったのでしょ？——私は貴女を見て、それで……見惚れてしまいました。——まあ！なんですって！おもしろい方ね。私をからかうなんて。ご冗談でも、褒め言葉として有り難く頂戴しておきましょう！——いや、冗談だなんて。お美しいですよ。——またそんなことを！そうよ、私、お美しいでしょ。それで、私は歌えているかしら？——貴女の歌は……あまりにお上手ですね。——どういうこと？あまりにお上手って？——あのですね、マダム。グルックの祭典では、装飾的な歌は全く認められていないのです⁽¹¹⁾。貴女の歌は、とりわけ刺繍の軽やかさと優美さで華やかになっていますね、なので、極めて荘厳で英雄的な儀式に出演していただくことはできないんです。——貴方、私を断るってこと？——ああ！そうせざるを得ないんです。——まあ！信じられない。——彼女は、怒りで顔を真っ赤にしてそう言うのと、持っていた薔薇の花を茎から引きちぎって、握り潰した。——では私、問い合わせたいと思いますわ。大臣と……（僕は笑ってしまったよ）皇帝に。——マダム、グルックの祭典の大臣は、僕なんです。——僕はとても穏やかに、でも真面目に、彼女に言った。——グルックの祭典の皇帝も、僕なんです。この儀式の手筈を整えることは、僕に任されているんです。僕がその絶対的な決定権を持っていて、そこでは僕が絶対的な監督者なんです。それで（僕は彼女を見ながら、苛立ちを半分ほど顕わにして）、貴女に歌っていただくことはないのです。——すると、美しいナディラは身体を震わせて、悔しさで涙が滲んでいる両眼を拭った。そして、大急ぎでその場を去って行った。

その苛々した気持ちが消えてしまうと、僕は破茶滅茶なお嬢さんの無邪気さに対して、笑いを堪えることができなかつた。彼女は、おそらくウィーンでは崇拜者たちに囲まれ、皆が自分の気まぐれに屈服するのを見慣れてしまっているのだろう。そして、何ら躊躇うことなく僕たちの祭典にやって来て、調和をぶち壊し、僕に我儘を押し付けようと思ったのだろう。

数日のあいだ、彼女に再び会うことはなかつた。祭典が行われた。《アルセスト》が堂々と上演された。その後、円形劇場にいる六千人が僕の賛歌を歌った。伴奏として用いた楽器は、百のクラリネット属とサクソ属の楽器、百のフルート属の楽器、四百のヴァイオリンと三百のハープのみ。さっきも言ったけれど、その感動は途轍もなく大きなものだった。喝采の嵐がひとたび静まると、皇帝がお立ちになった。そして、いつものようにご丁寧にお褒めくださり、グルック像に冠を捧げるという栄誉に預かる女性を選ぶにあたって、皇帝はその権利を僕に譲ってくださろうとした。人々はまた歓呼し、喝采を送った。この輝くような熱狂の瞬間に、僕の眼に美しいナディラの姿が飛び込んできた。彼女は遠くの席から、控えめな、悲しそうな眼差しで、僕を見ていた。美が芸術によって打ち負かされ、凌駕されたのを見て、突然、同情、哀れみ、そして悔恨のようなものさえもが、僕の心を襲った。僕には、芸術は寛大な勝者として、今やその栄光の一部を美に取り戻させるべきであろうと思えた。そして表現の神を冠で飾るにあたり、ナディラを、このウィーンの浅薄な歌手を、指名したんだ。そのと

きの皆の驚きは、言い表すことができない。誰も彼女を知らなかったんだから。ナディラは、顔を赤くしたり蒼くしたりしながら立ち上がると、グルックの祭司の手から花と葉と穂で作られた冠を受け取り、神の頭上に置くために、ゆっくりと円形劇場のなかを進み、神殿の階段を昇る。そして像の足元まで辿り着くと、人々のほうを向き、話をさせてほしいという仕草をする。皆静かになり、彼女に見惚れている。女たちでさえもが、彼女のこの上ない美しさに衝撃を受けているようだ。彼女は言う。「ユーフォニアの皆様。私のことをご存知ないでしょう。私は、昨日はまだ、輝かしく軽やかな声を持つだけの凡庸な女でしかありませんでした。偉大な芸術から、何らかの啓示を得たことなどなかったのです。私は、生まれてはじめて《アルセスト》を聴きました。そして、皆様と一緒に、シェトランドの賛歌の見事な壮麗さに感銘を受けました。今、私はわかります、聴こえるのです、生を得たのです。私は芸術家なのです。シェトランドの天才の直感だけが、それを予知できました。ですから、表現の神に冠を捧げる前に証明させてください。忠実な崇拝者である皆様。私がこの途方もない榮譽に値するという。そして、偉大なシェトランドが間違っていなかったことを」。こう言うと、彼女はその髪を飾っていた真珠や宝石を取り、地面に投げ捨て、踏みつけ（棄教を象徴するものだ）、胸に手を置き、グルックに頭を下げる。そして、崇高な声で抑揚と響きをつけて、アルセストのエール〈ああ、無慈悲な神々よ！〉⁽¹²⁾を歌い始める。

親愛なるグジレフ、その歌は聴いたこともないようなもので、それによって引き起こされた途方もなく大きな感情を、ここで正確な言葉で書き表すなんて無理だ。人々はそれを聴いて、皆少しずつ頭を下げていた。感動で胸がいっぱいになったんだ。あちらこちらで聴衆は手を繋ぎ、無意識のうちに、その手を頭上に掲げた。そしてついに、ユーフォニアの若い女性たちは、この永遠に滅びることのないフレーズが回帰したところで、泣き崩れた——「私の死を早めることをあなたにお願いしても、無礼にはなりませんまい」。

ナディラはウィーンの人々の騒がしい熱狂に慣れているから、ぞっとするような不安の瞬間を体験したに違いない。拍手喝采は一つも聞こえなかった。円形劇場の全体は、打ちのめされたかのように、静まり返っていた。しかし一分後にはそれぞれが息と声を取り戻して、（我らユーフォニアの住人たちの音楽的感觉に、改めて感心したまえ）、合唱の長官も僕もハーモニーを指示するサインなんて少しも示していないのに、一万人の叫びは自発的に減七の和音に向かっていき、その後には長調の荘重なカデンツになった⁽¹³⁾。ナディラは、はじめは動揺していたものの、この調和の取れた叫びを前にまっすぐに立ち、古代の彫像のようなその腕を上げ、感嘆、喜び、美、愛を一身に纏った彼女は美しく、気高きオリュンポスの神グルックの頭上に冠を置く。この堂々たる光景から今度は僕が刺激を受けて、激しい興奮に転じた熱狂を和らげるために、そして多分僕はすでに嫉妬していたのだけれど、《アルセスト》の行進曲⁽¹⁴⁾のサインを出した。すると、熱烈な信仰をもつユーフォニアの人々は皆跪いて、その宗教的な旋律の至高の主に敬意を表した。

僕たちは立ち上がって、ナディラの姿を探す。彼女は見えなくなっていた。僕が家に戻ったらすぐに、こちらに向かう彼女の姿が眼に飛び込んできた。彼女は近づいてきて、頭を下げて、こう言うんだ。「シェトランド、あなたは私に芸術を教えてくれた。あなたは私に新しい生を与えてくれたの。私は、あなたのことを愛しているの……。あなたも私のことを愛してくれるかしら？ 私という存在の全てを、あなたに捧げるわ。私の生、私の魂、私の美は、あなたのものよ」。僕は、少し黙って考えて、消えていく前の恋人のことを思いながら、こう答える。「ナディラ、君は僕に、芸術を超えた崇高な理想を見せてくれたね……。僕も、心から君を愛しているよ……。君を受け止めたい……。でも、もし君が僕を裏切ったりしたら、今も、これからも、君は終わりだよ。」——「私があなただけを裏切るなんて、今だって、これからだって、あるわけがないわ。でも、あなたのものになるという幸福と引き換えに、酷い死の報いを受けるとしても、私はその幸福がほしい。私はあなたにそれを求めたいの……。シェトランド！」——「ナディラ！……」僕らの腕……僕らの心……僕らの魂……無限なるもの……。

もうナディラは存在しない、ナディラは僕だ。もうシェトランドも存在しない、シェトランドは彼女だ！

親愛なるグジレフ、君の心は恋人の不在によって引き裂かれて血を流しているというのに、君にこんな話をしてしまうなんて、自分を恥ずかしく思うよ。でも情熱や幸福というのは、全くもってエゴイスティックなものだよ。でもね、僕の幸福は間欠的で、その輝かしい空気の中を、闇から放たれる恐ろしい光がときおり横切るんだ。僕がナディラに「僕も、心から君を愛しているよ！」と言った瞬間に、僕のハーブの三本の弦が不気味な音を立てて切れたのを、僕は思い出す……。僕はこの出来事を縁起が悪いことのように感じてしまうんだ。僕から失われていく芸術からの、別れの挨拶なのだろうか？ ……だって、もう僕は芸術を愛していないような気がしているんだ。でも、続きを聞いてくれ。

昨日の、焼けつくような夏の焼けつくような日中に、僕らは、彼女と僕は、空のとてもし高いところを飛んでいた。僕の飛行船は、どこに向かうでもなく、東から吹いてくる微風に任せて彷徨っていた。僕らは愛に酔いしれて、狂ったように抱き合い、芳香で満たされた僕のゴンドラにある柔らかい長椅子に横たわり、もう一つの生の境界に触れていた。たったの一步で、たった一つの思いきった行動で、僕らはそれを飛び越えることができたんだ！「ナディラ！」——僕は心臓の上で彼女を抱きしめながら言った。「愛しいひと！」「見てごらんよ、僕らにとっては、この世界にこれ以上何もありません。僕らは頂点にいる。もう一度下に降りる？ 死んじやおうよ！」彼女は驚いた様子で僕を見つめた。僕は付け加えた。「そうだよ、死んでしまおう。抱き合って、飛行船の外に身を投げよう。そうすれば、僕たちの魂は最後の接吻で一つになって、僕たちの身体が空中をくるくると廻って卑俗な地面に再び到達する前に、天空へと駆け昇るだろう。君もそれがいいだろう？ 行こう！」——彼女は答えた。「もうちょっと後にしようかな。まだ生きていきましょう！」。もうちょっと後って！ いや、後って。僕は考えた。僕たちにこんな瞬間はまたやってくるのだろうか？ ……ああ！ ナディラ、君もただの女でしかないのか！ ……それで、僕は留まっている。だって、彼女が留まることを望むから……。それでは、またね、友よ。君にこの手紙を書いて二時間になるけれど、そのあいだずっと彼女の姿を見ていない。彼女と離れているあいだずっと、凍った手によって胸から心臓がゆっくりと引き抜かれていく、そんな感じがしている。

シェトランド拝

註

(1) 本稿は、19世紀フランスの作曲家エクトール・ベルリオーズ Hector Berlioz (1803-69) が執筆した小説『ユーフォニア、あるいは音楽都市 *Euphonia ou la ville musicale*』(1844年、1852年改訂)のうち、「パリ」と「第三の手紙」を日本語に翻訳したものである。前年度の『研究紀要』で日本語訳を公表した「第一の手紙」と「第二の手紙」に続く、作品の中間の部分になる。残りの結末の部分は、次年度以降に公表することを予定している。今回訳出した部分も、『オーケストラ夜話 *Les soirées de l'orchestre*』の第二版(1854年出版)を底本とし、日本語訳と註の作成にあたっては、レオン・ギシャルが編集したテキストと註、ジャック・バーザンによる英訳、ベルリオーズの音楽批評全集の第五巻に含まれる1844年版のテキストと註などを参考にした。

「パリ」は、グジレフとシェトランドの往復書簡のあいだに挿入される「幕間劇」である。我儘で貪欲な美人歌手ミナとその母親の喜劇的なやりとりは、ミュッセの格言劇などを思わせるが、これはベルリオーズ自身がかつてピアニストのカミーユ・モーク Marie (Camille) Moke (1811-75) に婚約を破棄されたエピソードを下敷きに、恋多き彼女の悪女ぶりを戯画化したものである。

シェトランドからグジレフへの返信である「第三の手紙」では、架空の音楽都市ユーフォニアにおいて開催された、グルック Christoph Willibald Gluck (1714-87) を奉る音楽祭の様子が描かれる。ここでベルリオーズは、グルックという作曲家の偉大さを示すだけでなく、偉大な芸術家が社会のなかでどのように扱われるべきか、その理想的なあり方を読者に訴えている。

- (2) モデルとなったカミーユ・モークは、パリ出身のヴィルトゥオーゾ・ピアニストである。ジャック・エルツ Jacques Simon Herz (1794-1880)、イグナツ・モシュレス Ignaz Moscheles (1794-1870)、フレデリク・カルクブレンナー Frédéric Kalkbrenner (1785-1849) の下で学び、十代の頃から演奏活動を行っていた。1831年にピアノ製造業者のブレイエル Camille Pleyel (1788-1855) と結婚するものの、1835年に離婚している。1848年から1872年まで、ブリュッセル音楽院でピアノの教授を務めた。
- ベルリオーズとモークが恋愛関係にあったのは、1830年から31年にかけてのことである。二人の破局のエピソードについては、ベルリオーズが『回想録 *Mémoires*』に詳述している。それによれば、イタリアに留学中のベルリオーズは、モークの母親から手紙を受け取り、二人の婚約の解消と、モークとブレイエルの結婚を、一方的に知らされた。激昂したベルリオーズは、モーク母娘とブレイエルの殺害を企てたものの、パリへ向かう旅路の途中で冷静さを取り戻し、その計画は未遂に終わった。
- (3) オペラの創作において音楽を詩に沿わせることを目指す「改革」を行った作曲家グルックは、ベルリオーズが最も大きな影響を受けた作曲家であった。『回想録』の記述によれば、ベルリオーズが音楽家を志すことを決意したのは、1822年にパリのオペラ座でのグルックの《トーリードのイフィジェニ *Iphigénie en Tauride*》の上演に接したときのことである。この18世紀の作曲家は、ベルリオーズにとって常に畏敬の対象であり、劇的な音楽の創作における「師」であり、聴衆の忘却から保護すべき遺産であった。
- 1830年代以降、パリのオペラ座におけるグルック作品の上演が減るなかで、ベルリオーズは批評活動と演奏活動を通して、グルックの「布教」を熱心に行った。1844年に音楽雑誌上で公表されたこの小説も、グルックの偉大さをパリの聴衆に教え、レパトリーに残そうとしたベルリオーズの言論活動のなかで生み出されたものである。グルック作品は、1850年代から60年代にかけて、ベルリオーズの手によってパリのオペラ座でリバイバルを果たす。1859年に行われた《オルフェ *Orphée*》の蘇演では、メゾ・ソプラノ歌手のポーリース・ヴィアルド Pauline Viardot (1821-1910) が題名役を歌い、大成功を収めた。それを受けて、1861年と66年には《アルセスト *Alceste*》が上演された。
- (4) このグジレフとミナのやりとりは「第一の手紙」のなかでも描かれたものだが、ピアニストのフェルディナンド・ヒラー Ferdinand Hiller (1811-85) とモークのあいだで交わされたという同様の会話が、『回想録』に記されている。ヒラーは、ベルリオーズの友人であるが、ベルリオーズの前にモークと恋愛関係にあった。
- (5) イタリア語版の《アルチェステ *Alceste*》(1767年、ウィーン初演) は、グルックが台本作家カルツァベージ Ranieri Calzabigi (1714-95) と共作したもので、彼の「改革オペラ」の一つに数えられる作品である。フランス語版の《アルセスト》は、デュ・ルレ François-Louis Gand Le Bland Du Roulet (1716-86) の台本によるもので、1776年にパリのオペラ座で初演された。《アルセスト》は、ベルリオーズがグルックについての批評活動のなかで、最も頻繁に取り上げた作品であった。
- (6) ベルリオーズが少年時代に思いを寄せていたエステル・デュブッフ Estell Dubcof (1797-1876) を想起させる。『回想録』には、彼女のことを星に喩える記述が見られる。
- (7) 底本とした『オーストラ夜話』第二版では単純未来形「respirerais」になっているが、ここでは『オーストラ夜話』の初版やギシャール校訂版に従い、半過去形の「respirais」と解釈した。
- (8) 「第三の手紙」に続く部分で、シェトランドが著したユーフォニアの地誌を全文掲載するという形で、音楽都市の詳細が説明される。その記述によれば、ユーフォニアでは声種や楽器によって居住地が分かれており、ソプラノ歌手が住む「ソプラノ通り」がある。
- (9) 一ピエは一フィート（約三十センチメートル）。
- (10) 註8参照。ユーフォニアでは、高い塔の上に巨大なオルガンが設置されており、それが練習や生活の時刻を知らせている。
- (11) 歌手による技巧性の誇示を回避することも、グルックが「オペラ改革」のなかで目指したことのひとつである。

- (12)《アルセスト》の第三幕第三場のエール（ヘ長調、3/4拍子）。王妃アルセストが、愛する夫の命を救うために、神託に従って自分が身代わりとなって死ぬことを決意し、死の祭壇に向かって歌う場面。
- (13)ベルリオーズが、1843年3月のブラウンシュヴァイクでの演奏旅行の際に経験したという、音楽愛好家たちの歓声のエピソードを想起させる。『ユーフォニア』と同じ1844年に刊行された著作『ドイツ及びイタリアへの音楽の旅 *Voyage musical en Allemagne et en Italie*』の記述によれば、同地で行われた音楽愛好家たちによる歓迎会で、祝杯のたびに歓声が上がリ、それが和音を形成し、カデンツが歌われた。この記述は『回想録』にも再録されている。
- (14)第一幕第三場で、王の臨終を嘆く人々がアポロン神殿に向かう場面のパントマイムの楽曲（ト長調、4/4拍子）か？あるいは最後のディヴェルティスマンの行進曲（ニ長調、4/4拍子）か？

参考文献

『ユーフォニア』（1844年版、1852年版）

Berlioz, Hector. *Les soirées de l'orchestre*. 2nd ed. Paris: Michel Lévy frères, 1854.

———. *Euphonia ou la ville musicale. Nouvelle de l'avenir*. Edited by René J. Bonnette. Toulouse: Éditions Ombres, 1992.

———. *Evenings with the Orchestra*. Edited and translated by Jacques Barzun. Chicago: University of Chicago Press, 1999. (Orig. pub., New York: Alfred A. Knopf, 1956.)

———. *Hector Berlioz: Critique musicale*, Vol. 5 (1842-1844). Edited by Anne Bongrain and Marie-Hélène Coudroy-Saghai. Paris: Buchet-Chastel, 2004.

———. *Euphonia, ou la ville musicale. Nouvelle de l'avenir*. Edited by René J. Bonnette. Toulouse: Éditions Ombres, 2012.

その他

Berlioz, Hector. *Mémoires d'Hector Berlioz de 1803 à 1865*. Edited by Peter Bloom. Paris: Vrin, 2019.

Citron, Pierre, Cécile Reynaud, Jean-Pierre Bartoli, and Peter Bloom, eds. *Dictionnaire Berlioz*. Paris: Fayard, 2003.

Rushton, Julian, ed. *The Cambridge Berlioz Encyclopedia*. Cambridge: Cambridge University Press, 2018.